

高橋和之先生の古稀をお祝いして

江 島 晶 子

高橋和之先生は、2013年12月に古稀の嘉齢を迎えられました。心からお慶び申し上げます。2006年に本法科大学院に加わってくださって以来、研究および教育の両面に渡って大変お骨折りくださいましたこと深く感謝申し上げます。

研究も教育も、いまだ山のふもとで迷っている私が、高峰にいらっしゃる高橋先生のことについてお書きするなど大それた試みとしかいいようがないのですが、これまでお世話になりましたお礼の気持ちの一端として書かせていただきます。はなはだ見当違いなことを申し上げておりましたら、どうぞご容赦ください。

高橋先生に最初にお会いしたのは、学会の折と記憶しております。当時、大学院に進学したばかりで、研究については暗中模索状態だった私が、憧れをもって手にした最新の研究書の一つが先生のご著書『現代憲法理論の源流』でした。学会でお見かけした先生は、研究書から受けた通りの凜然颯爽としたご風貌で近寄りがたい印象を受けたのですが、指導教授から高橋先生を紹介して頂いた際に暖かい言葉を頂戴し感激したことが懐かしく思い出されます。

高橋先生は、別掲の業績目録が示しているように、学説史、統治、憲法訴訟、人権と、幅広い領域において輝かしい業績を築かれておられ、それぞれの領域において他の追随を許さないものであることは言うまでもありません。しかも、そのいずれもが、既存の通説に対して鋭い疑問を投げかけられ、見事としかいいようのない大胆かつ精緻な論理で新しい意見を提示されていらっしゃいます。大胆と精緻は、本来、相並ばないものなのかもしれませんが、高橋先生の手

かかるとそれが全く自然に同居しています。どのように着想を得られるのか、どのように着想を發展させられるのか、どのように誰をも唸らせる理論へと精錬されるのか。ただ畏敬の念をもって見上げるばかりでした。

幸運にも本法科大学院において高橋先生の警咳に接する機会に恵まれまして、より一層感嘆したことには限りがありません。なかでも強く印象に残っているのは、「論理的に考える」、「筋を通す」という姿勢です。法科大学院における教育の議論の中で、高橋先生が「学問の自由」ということに言及されたとき、思わず自省せざるをえませんでした。自己の研究対象に真摯に向き合い、理論の鍛錬を欠かさず行い、論理的に考えれば迷うことなく出てくるはずの結論を、自分はいかなる理由で退けているのかと。透徹した思考を常に行っている高橋先生にとっては、確立した学説の弱い部分に自然に目が行くのだと一層合点がいった次第です。先生の執筆された教科書である『立憲主義と日本国憲法』では、その真骨頂が発揮されていて、読み手を知的愉悅へと誘ってくださいます。そして、同書の背後にある数々の骨太の業績からは、「立憲主義」こそが、先生の「筋」なのだと感じる次第です。

さらに、敬服いたしましたのは、高橋先生の「研究者」としての飽くなき学術的探究心です。たとえば、ポジティブ・アクション、インターネットなど、伝統的憲法像を揺さぶる新たな要請や事象に対して、誰よりも早く積極的に探究の目を向けられておられます。しかも、フランスやアメリカを中心とする幅広い比較憲法の知見と海外に向けた発信・交流の数々にも感嘆いたします。

そして、学問全体の発展に対する多大な貢献は憲法学にとどまりません。重要な例には事欠きませんが他所で紹介があるものは避けて、自分が幸運にも身近で拝見いたしました例の一つ取り上げさせていただきます。人権保障をめぐる憲法と国際法の関係について発表された高橋先生のご高論は、国際人権法学会において活発かつ有益な議論を呼び起こしました。「論理」をつきつめた結果は、あらゆる立場の者が加わりたくなる議論の「場」を出現させました。その結果、人権保障をめぐる憲法学と国際法学の「架橋」のさらなる必要性がクローズ・アップされたように思います。この架橋は、現在も、国際人権法学

会で真剣に取り組まれている継続的課題の一つです。学問は、新たな問題提起があってこそさらなる発展が望めると思いますが、学会全体を議論に巻き込むことのできる研究力をもった学者はそうはいないのではないかと敬服させられました。

法科大学院では、教育者としての先生にも接することができました。高橋先生は、本当に惜しみなく教えてくださいます。法科大学院生からは、高橋先生の授業に対する賞賛の声を何度となく聞きました。また、先生の最新のご高論の抜刷りをくださったり、「〇〇についてイギリスではどのような議論があるのですか」と聞いてくださったりと、その都度、高峰に誘っていただいたような気持ちになりました（後者のご質問については、十分にお答えできなかったことが心残りで、後日論稿をまとめましたが、これも、今にして思えば先生のお力だと思わずにはいられません）。

法科大学院は、ますます厳しい時代を迎えようとしています。そんな時こそ、「筋を通す」ことが大切なのかもしれません。他方で、時代の流れを読み、幅広い視点での対応も必要だと感じます。先生にいろいろお伺いしたいこと、教えていただきたいことがまだまだ多数ございます。高橋先生のこのたびの定年退職は誠に残念でならないだけでなく、寂しさを感じずにはいられません。

今後ますますのご健勝とご活躍を心からお祈りしますと同時に、荒波を進んでいきます法科大学院に対して光を照らし続けてくださいますようお願い申し上げます。